

盲導犬とともに寄り添う～盲導犬歩行指導員として～

目の不自由な方の歩行や日常生活を支える盲導犬。1978年「道路交通法」によって盲導犬の存在が法的に認知され、2002年「身体障害者補助犬法」によりさまざまな施設・交通機関に同伴することが認められた。その数1043頭（2012年3月末現在）であるのに対し、盲導犬を希望する人は約3000人にもものぼる。日本盲導犬協会神奈川訓練センター（1997年開設。以下、センター）では、盲導犬の育成や視覚障がい者が盲導犬と生活するためのさまざまな訓練を行う、日本初、国内最大の施設である。その訓練を担うのが、盲導犬訓練士（以下、訓練士）と盲導犬歩行指導員（以下、指導員）だ。

今回は、指導員歴6年となる丹伊田貴真盲導犬歩行指導員にお話を伺った。



丹伊田貴真指導員

■盲導犬訓練士と盲導犬歩行指導員とは

指導員とは、盲導犬を育てたり、視覚障がいの方が盲導犬と一緒に生活できるようさまざまなサポートをしたりする仕事です。指導員と訓練士の違いは、人を指導できるかどうかです。指導員は犬を訓練する資格に加えて視覚障がい者の方に盲導犬の扱い方を指導したり、盲導犬としてデビューしたあとのケア（フォローアップ）をしたりします。指導員のほうが幅広い仕事ができるのです。

■指導員の仕事

犬に基本的な指示を教えていく基本訓練、ハーネスをつけて実際に街なかなどで行う誘導訓練のほか、共同訓練というものがあります。視覚障がい者の方と盲導犬をつなぐ訓練です。盲導犬をもつ方（以下、ユーザー）が初めての場合、約1か月間、センターに泊まり込みで、犬との歩行をはじめ世話のしかたについてなどの訓練をするんですね。その共同訓練が終わったら、今度はユーザーの自宅付近で1週間くらい一緒に訓練をします。その後私たち指導員は帰り、ついに盲導犬との生活を始めてもらいます。ですが、すぐには生活や歩行が安定しないんです。飼育や犬との歩行を徐々に生活に組み込んでいくので、定期的に状況を確認しに自宅へ伺います。

■指導員をめざしたきっかけ

指導員という資格があること自体、一般的には知らない人が多いですね。私も訓練士しか知りませんでした。大学卒業後に、私は青年海外協力隊としてバングラデシュに行き、2年ほど、理科の先生をしていました。その時に、現地の聾学校

や肢体不自由な子どもたちがハンディクラフトとかをつくって売っているようなところに、活動とは別のかかわりをもって遊びに行っていたんです。その経験がもととなって、帰国後には国際協力か福祉の道に進もうと考えました。そこで、日本にいるなら福祉の方へ行ってみようと思っていたところに、たまたま日本盲導犬協会のHPで、盲導犬訓練士学校ができることを知りました。もともと訓練士に興味があったこともあって、応募してみました。それが2004年で、私は学校の一期生でした。

訓練士や指導員をめざすのは学生や一般企業で働いていた人などさまざまです。一つ私が思うのは、中学生のうちからいろいろなことを経験しておいてほしいということです。この仕事は、実は人とうまくコミュニケーションをとることが重要だし、柔軟性が必要なんです。個々の盲導犬やユーザーにあった訓練をしなければならない。私がやっていたボランティアでもいいし、違う養護学校に行ってみるのもいいので、視野を広げておいてほしい。私もバングラデシュでの経験がとても生きています。異文化を受け入れる下地をだいぶ鍛えられました。目の不自由な方との接し方は異文化交流みたいなどころがあります。相手にとっての常識は何なのかを知ることが大切ですよね。

■盲導犬とのかかわり

生後1歳くらいまではパピーウォーカーといわれるボランティア宅で過ごして、1歳から約1年、盲導犬として訓練します。当協会では、盲導犬として働くのは2歳前後から10歳までと決めているので、働く期間は8年間です。ユーザーの安全を

考えて元気なうちに引退させて、次の犬をタイムラグがない状態でお渡しする形にしています。

引退する犬は、年間20頭くらいいます。基本的には引退犬飼育ボランティアのお宅で、普通のペットと同じように過ごしてもらいます。ただ、歳をとっていくためさまざまなケアが必要になります。私たちが飼育委託をするという形になるので医療費の補助などをします。盲導犬として一生を終えるまで、私たちに責任があるのです。

■盲導犬とユーザーのマッチング

ユーザーのニーズや生活様式などにはさまざまな要素があるので、これには苦勞します。たとえば仕事をされている方だと、仕事中は待機しないといけないので、待機が得意な犬を届けるなど配慮します。歩く速度も、ゆっくりの人、速い人。あとは年齢や性別、そういう条件に応じてどういう性格の犬をあてればいいのか違うんです。毎回かなり頭を悩ませますね。

とくに生活面での課題が多いです。ペットと同じで、家のなかでどういうふうにもその犬が過ごすが重要です。たとえば盲導犬もいたずらをしないとはいえないんですよ。あとは盲導犬に大事なのは排泄です。犬がしたい時、また、させておきたい時に決められたところで排泄することが大切です。人によってどういう状況で排泄させるかはまったく違うんですね。ユーザーの住環境も含めて総合的な条件を考慮して、犬を選んでいきます。

■指導員としてのやりがい

やりがいを感じるのは、盲導犬を渡したあとのユーザーの生活や行動範囲が変わっていくのをまのあたりにした時です。やはり盲導犬をもたれてからの方が行動範囲が広がるんですね。この前、盲導犬をもって1年弱のユーザーとお話をした時のことです。それまでは白杖はくじょうで歩いて通勤されていました。通勤といっても、いろいろな行き方がありますが、その方は白杖を使って歩いている時は、決まった道だけを歩いていたんです。でも盲導犬がいればこっちに行ったらどこに出るんだろうとか、行ってダメだったら戻ってこればいいと考え



盲導犬は階段があることを教え、ユーザーと歩調を合わせる



障害物をよける訓練

られるようになり、明らかに歩く道のルートや行動範囲が広がったとおっしゃっていました。そういう言葉をいただいた時にやりがいを感じますね。

■今後の課題

やはりユーザーの高齢化は課題です。若い人と高齢の方に届けるのでは、歩く速度がかなり違うので盲導犬の速度調整が必要です。また、盲導犬といっても犬なので、ほかに散歩している犬とかに興味はあるんですね。訓練して、歩きなさい、まっすぐだよと言われているからまっすぐ歩けるんです。そのため、なるべくまわりへの興味の薄い犬を訓練して行って、高齢者向けに育てていくことが重要です。また、高齢になると目だけでなく聴力も衰えます。その場合一番危険なのが車です。交差点を横断する時に、犬は信号を判断しません。横断歩道があるから止まっているだけなんです。止まったあとに発進するかどうかは人側の責任で、人が車の音を聞いて発進の指示を出すんです。聴力の弱い方はそこが難しくなってきます。なので、発進の指示が出ても、急に車が来た時に犬が止まるという訓練をかなり強化していかなければなりません。

また、当協会は助成金と寄付金で運営しているため資金面の課題もあります。でも、盲導犬を必要とする方々が約3000人も待っている現状に少しでも応えたいと思っています。盲導犬や視覚障がい者の方、そして訓練士・指導員について多くの方々によく知っていただけることを願っています。

本記事の作成にあたりましては、公益財団法人日本盲導犬協会様にご協力いただきました。ありがとうございました。

